

■ 編集だより

編集後記

武漢から未確認の感染症が発生したのは年末、日本では大丈夫であろうと対岸の火事として高を括っていた。しかし、2月の終わり頃から情勢が変わり、まだ感染者数はそれほど多くないものの、「もしかしたら」という考えが首をもたげ、3月になると父兄や在校生不在の卒業式の挙行という異常事態となり、4月7日に緊急事態宣言が発令され、ほとんどの施設では入学式が中止された。わが母校も入学式がなく寂しい限りである。もっと辛いのは対面授業ができないことである。待ちに待っていた緊急事態宣言の解除が延期され、諦めと落胆、安心や悲壮と複雑な感情が交錯しながら、大きな波を越えた。経済的悪化の懸念から政府は5月25日に全国で緊急事態宣言解除に踏み切った。

今回の新型コロナウイルスの感染流行で人はどのように変わったのか？ 何を失ったのか？ 行動変容としては、手洗い、マスク着用、三密を避け、コンビニエンスストアのレジでは間隔を空けて並ぶなどの social distance を守り、飛沫感染防止のためのビニールカーテンごしに電子マネーで支払い、仕事では時差出勤やテレワーク、学校ではオンライン授業が急速に導入された。不足しているマスクは高額転売され、他のものまで便乗値上げとなる。デマの流布で一時はトイレトペーパーまで店頭から消えるなど、オイルショックの時を思い出してしまった。電車内で咳でもしたら白い目でみられ、自粛しない店に対して誹謗中傷、院内感染がクローズアップされ医療従事者やその家族への差別にまで及んだ。

新型コロナウイルスの感染への恐怖が根底にあるのは言うまでもないが、それによって社会が変わってしまう。急激な変化に対して人は弱く、普段の生活を維持したい本能が働き、利己心が強くなると視野が狭くなり、自分のことしか見えなくなる。しかし、自分が不利益を免れ他人が不利益を被ることで社会が不安定になれば、結局自分にそのツケが回ってくる。感染症も自分だけ、自国だけ助かれれば大丈夫という訳にはいかない。世界全体がコロナ感染を克服することで、はじめてマスクをつけず皆が集って気楽に会話ができる日常を取り戻すことができる。

人との絆が失われそうななかで、繋がってほしいという思いからインターネット技術を駆使して有名人がメッセージを発信、オンライン飲み会が登場した。医療現場でもオンライン診療が進み、面会禁止のストレス軽減のためオンライン面会、さらに医療スタッフのメンタルサポートチームを立ち上げ、スタッフのケア体制が整い始めている。

人類はこれまでも逆境をバネにして、パラダイムシフトを起こし、発展を遂げてきた。今回の新型コロナウイルス感染流行で研究が滞るとの報道があったが、一方、感染に関する多くの研究速報がウェブ上で毎日のようにアップされている。感染症への不安、医療体制の変化、人々のかかわりの見直し、自粛や経済悪化が人々に悪影響を与え、精神科領域ではアルコールをはじめ薬物の乱用や依存、自殺、児童虐待などの増加がすでに社会的問題になりつつある。感染流行の第一波を越えたところで、次に発生すると思われる問題を予測し、その対策を練っておかねばならない。この逆境をプラスに変えることは、さらなる精神医学の進歩に繋がる。まだ進行形ではあるが新型コロナウイルス感染症がわれわれに与えたものを論文にして、本誌へ投稿してくれることを望む。

忽滑谷和孝